

農作物技術情報 第8号 野菜

発行日 令和3年 10月 28日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 来年の安定生産に向けた作業（残さの処分、資材消毒、土づくり）を行いましょう。
- ◆ 施設野菜 省エネ対策技術を積極的に実施しまししょう。
- ◆ 寒じめほうれんそう 適切なハウスの開閉により生育調節と品質確保を図り、適期に出荷しまししょう。
- ◆ 促成アスパラガス 低温遭遇時間を考慮して適期に掘り取りを行い、収量を確保しまししょう。

1 生育概況

- (1) 果菜類の収穫は終盤となり、出荷量は少なくなっています。
- (2) 雨よけほうれんそうの生育は概ね順調です。病害虫は、ホウレンソウケナガコナダニやシロオビノメイガなどの被害が見られています。寒じめほうれんそうの播種は概ね終了しています。
- (3) 稲刈り作業が終わり、ねぎは順次出荷されています。病害虫は、葉枯病（黄色斑紋病斑）、さび病等の発生が見られます。

2 技術対策

(1) 栽培跡地の整理と来年に向けた準備

栽培終了後の作物残さは適切に処分し、翌年の病害虫発生源にならないようにします。

きゅうりで褐斑病が毎年多発する圃場では、支柱や灌水チューブなどの資材に付着した分生子が翌年の発生源になります。残さの後片づけと資材消毒を行い、翌年の発生源を排除します。

ピーマンでは、根の残さで土壤伝染性ウイルスのPMMoVが越年します。残さのすき込みは土壤中のウイルス密度を高め、抵抗性打破の危険性が高まるので絶対に避けてください。

なすでは、半身萎凋病の罹病葉に形成された菌核が次年度の発生源となりますので、発生圃場では葉を確実に圃場から持ち出し処分してください。

また、来年の安定生産に向けた土づくりを実践してください（図1）。

(2) 野菜畑での施肥管理について

県内の野菜畑では、可給態リン酸や交換性カリウムなどが土壤改良目標値を満たした圃場が多く、中には無施用でもよい水準まで蓄積している事例もあります。また、カリウム過剰はカルシウムの吸収を

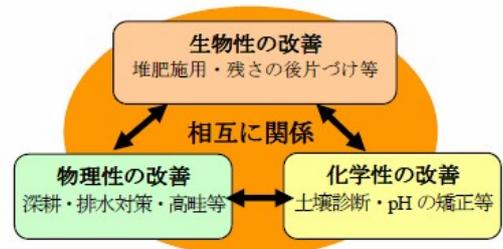


図1 土づくりで重要な三つの性質

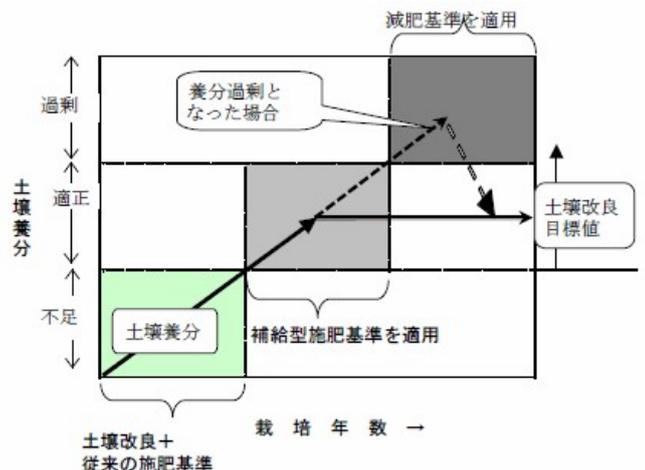


図2 土壤養分に応じた施肥管理基準の適用

阻害し、尻腐果発生の一因にもなります。土壌分析の結果、土壌改良目標値を満たしている圃場では、「土壌から持ち出された肥料成分を施肥で補給する」補給型施肥基準を適用するとともに、土壌養分の過剰が明らかな場合には、減肥基準に基づき適正な施肥管理に努めてください（図2）。

（3）施設野菜

燃油費や資材費等を含めた冬季の施設野菜の生産コスト増加は、農家経営に大きく影響します。最小限の燃油で高い加温効果が得られるよう、省エネルギー対策を積極的に実施します。具体的には、

- ア 暖房装置の点検・整備、清掃による暖房効率の低下防止
 - イ 温室の被覆資材の隙間からの放熱防止
 - ウ 内張資材等の導入による保温性の向上や温室内の温度ムラの解消
 - エ 作物・品種の特性をふまえた生育ステージ毎の適正な温度管理の実施
- などが挙げられます。

（4）寒じめほうれんそう

ハウスの開閉による適切な温度管理を行い、出荷できる大きさまで生育させますが、低温下で開帳しやすく、葉の縮みも入りやすい地域推奨の品種（「冬霧7」「雪美菜02」等）の特性に応じた管理を心がけます。

寒じめは、ほぼ収穫できる葉長になった時点で、ハウスの入口やサイドビニールを開放し、1週間程度5℃以下の低温に連続して遭遇させて糖度の上昇を図ります。本県では、葉柄の Brix 糖度8%以上を出荷基準としていますので、この糖度が得られる12月1日以降に出荷します。

（5）促成アスパラガス

地上部から貯蔵根への養分転流は、茎葉が完全に黄化するまで続いています。地上部の刈り取りは茎葉が十分に黄化してから行ってください。

また、十分に低温遭遇した株を利用することで、収量が増加する（図3）ので、5℃以下の低温遭遇時間を考慮して掘り取り時期を決定します（90時間を目標）。

過去3年間の県内の主なアメダス地点における5℃以下低温遭遇時間が90時間に到達する日は、表1のとおりです。

栽培面積が大きい場合には、掘り取り作業と伏せ込み床の準備を計画的に進めます。

伏せ込み後に、伏せ込み床内の温度を急に上げると収量が低下する場合がありますので、伏せ込みしてから1週間程度は無加温とし、吸水するための新しい根を発生させてから、徐々に温度を上げるようにしてください。

ハウス内の保温対策は万全にし、加温コストの低減に努めます。

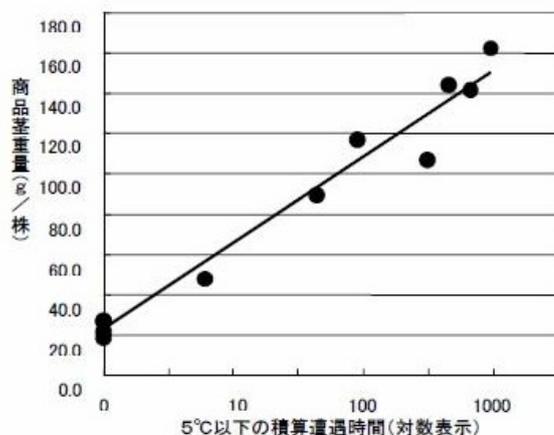


図3 掘り取り前根株の低温遭遇時間と商品茎重量との関係
(商品茎：5g以上の若茎)

表1 5℃以下積算遭遇時間が90時間に到達する日(2018-2020)

年	二戸	奥中山	盛岡	北上
2020	11月4日	10月30日	11月11日	11月12日
2019	11月7日	11月2日	11月13日	11月20日
2018	11月3日	10月26日	11月15日	11月20日

【伏せ込み後の温度・水分管理】

- ア 掘り取り時に脱落・乾燥した吸収根の再生を図り、長期間にわたって品質の良い若茎を収穫するため、伏せ込み後1週間～10日程度は加温せず、若茎の萌芽を抑制する。その後、徐々に地温を16～18℃まで上げてゆく。伏せ込み直後に加温を行うと、若茎の萌芽にエネルギーが使われて吸収根の発生が阻害され、吸水が順調に行われずに低収となる。加温開始後は温床の上に小トンネルをつくり、ビニールや保温マットをかけ、温度を維持する。
- イ 萌芽開始後は、地温15～16℃、トンネル内気温日中25℃以下、夜間10℃以上を目標に管理する。
- ウ 萌芽が始まると、若茎の伸長に水分が多く利用されるので、伏せ込み床の乾き具合に応じて、晴天の午前中に気温が上昇してからかん水する。かん水量が少ないと、曲がりや開き等の障害茎が多くなり、収量が低下する。特に、1回目のピーク終了後にかん水量が不足することが多く、その後の品質が低下する場合があるので、注意が必要である。一方、アスパラガスは湿害に弱い作物でもあり、かん水量が多すぎると根や地下茎の腐敗につながることから、伏せ込み床の水分状態は適正に管理する必要がある。
- エ できるだけ太陽光を当て着色を促す。また、若茎は凍害や低温によるアントシアンの発現が見られるため、夜間5℃以下にならないよう注意する。

次号は11月25日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

全集中 ゆとりの呼吸で 安全作業

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。